

めでいかすとり  
Médicastre



「 姫路城 」

## 鶴岡地区医師会新年会

日時：平成30年1月12日(金) 18:30～  
場所：新茶屋

九州にまで雪を降らせた寒波の影響で鶴岡も大雪となった中、33名のご来賓の方々をお迎えし、総勢98名で恒例の鶴岡地区医師会新年会が開催されました。

はじめに土田会長の挨拶では、医師会の各事業の運営状況についてのお話があり、今年度は概ね良好となっているが、一部事業では新たな不安要素がみられている。また会員の先生方には本業以外の関係諸団体の役員や医師会役員、学校医や施設嘱託医等様々な仕事を引き受けてもらっているが、需要に供給が追いついていない現状がある。会員の先生方の負担が増えている事、会員間に差があることでの不公平感などの課題があり、今後は更に行政との連携・相互理解を深めていく必要性があると述べておりました。来賓の加藤鮎子議員からは、昨年の衆議院議員選挙での協力への感謝の言葉と、医療・介護現場での課題の解決に尽力していくとのお話がありました。鶴岡市長代理の山口朗副市長からは、日頃の連携についての感謝と、食文化創造都市の認定や「がんメタボロミクス研究室」の開所、「出羽三山生まれかわりの旅」と「サムライゆかりのシルク日本近代化の原風景に会うまち鶴岡へ」の日本遺産の登録についてご紹介いただきました。酒田地区医師会十全堂の栗谷義樹会長からは、酒田地区で新たに地域医療連携推進法人設立を検討していることについてご紹介いただきました。ご来賓3名の方から祝辞を賜り、齋藤久市会議長の乾杯のご発声で宴会が始まりました。

ライトアップされた雪景色の庭園を眺め、季節のお料理やお酒を楽しみながら、来賓の方々や医師会の先生方で賑やかに交流を図る時間となりました。

最後は鈴木伸男先生から、上野動物園のパンダ誕生の話題に関連し「よ～ジャンジャン・パン」の掛け声での一本締めでお開きとなりました。

介護老人保健施設 みずばしょう  
工藤 由美



日時：平成29年12月19日(火) 19：00～  
場所：東京第一ホテル鶴岡

## 鶴岡市立荘内病院主催 地域医療連携推進協議会・鶴岡地区医師会・登録医・荘内病院「合同懇談会」

昨年12月に行われた「合同懇談会」(参加者65名)において荘内病院の取り組みについてご紹介させていただきました。今回発表した3名に内容を要約していただきましたのでご参照ください。講演終了後は懇親会が行われ、和やかに歓談し交流を深めました。〈荘内病院地域医療連携室 鈴木貞子〉

### 荘内病院における肝胆膵外科手術の現状

消化器病センター長兼外科副主任医長  
白幡 康弘



消化器外科の中でも肝胆膵外科領域は、手術の難易度が高く、合併症が多いなど、専門性を問われる分野と言えます。平成14年に東北大学から酒田病院に赴任し、日本海総合病院を経て、平成28年から出身地である鶴岡市立荘内病院・外科に赴任しました。医師会の皆様にご紹介いただき、この庄内地方にて足かけ15年で560例以上の肝胆膵外科手術を行うことが出来ました。昨今、社会の厳しい評価を受ける領域ですが、庄内地方でただ一人の肝胆膵外科学会・評議員、高度技能医制度・指導医として地域の患者さんのため、他の地域に引けを取らないように、自負と責任感にて頑張りたいと思います。

さて、平成28年4月から1年6ヶ月にて74例の肝胆膵手術を施行しました。肝細胞癌や転移性肝腫瘍、胆管癌や膵癌など、原疾患は様々で、非常に厳しい手術もありました。最高体重は98kgの方もいれば、元気な85歳の男性の方もいました。皆さん元気に退院し、外来通院されております。手術だけではなく、術後もしっかりと管理し、一緒に頑張り、元気に退院されることを目標にしております。また、現在の肝胆膵外科領域では、手術だけでなく、術前術後含め、化学療法が必須となっており、外科医は手術のみならず、抗癌剤、分子標的薬を含めた化学療法に習熟しなくてはなりません。日本における肝胆膵悪性腫瘍の化学療法は全て、多数の施行経験があり、放射線治療含

め当院にて出来る体制を整えております。

肝細胞癌においては、C型肝炎が飲み薬(DAA)にて治る時代となりましたが、NASH(非アルコール性脂肪肝炎)由来の発癌が多くなる傾向にあります。糖尿病の患者さんの画像的スクリーニングが重要となっており、地域の開業医の先生との連携が大事となっております。胆管癌、胆嚢癌については、黄疸にて発見されることが多く、多くは進行癌の状況です。肝切除や、膵頭十二指腸切除を含む大きな手術を行う必要があり、消化器科の先生と連携し、早期に減黄し、手術を行うよう心掛けています。膵癌に関しては浸潤傾向も高く、根治に関して厳しい疾患ですが、血管合併切除、再建も行い、根治性を求め、諦めない心意気でっております。地域の皆様が、地元にて、安心して手術を行え、他の治療含め完結できる体制を今後とも整えていきたいと思っております。

### 地域周産期母子医療センターにおける 地域との連携強化に向けた 母子育児支援チームの役割

NICU看護係長 和田 美枝  
(新生児集中ケア認定看護師)



当院は、平成22年より地域周産期母子医療センターとして認定されています。年々ハイリスク分娩件数が増加し、それに伴いNICUの入院数も増加しております。昨年度の入院数はどちらも認定当初の約2倍となり、庄内地域の周産期母子医療センターとしての役割が重要となっていると実感

しています。

近年、精神疾患や若年の妊娠が増加しており、育児困難による支援が必要な症例が多く見られています。また、児がNICU管理となることで母子分離となり、愛着形成に問題が生じる症例や退院後も医療的ケアが必要となる症例などは、ネグレクトなどの虐待に繋がる可能性があります。そのため、妊娠早期から予測される問題を把握し、安心して出産し健やかに育児ができるための環境作りが必要と考え、平成28年秋に母子育児支援チームを立ち上げました。メンバーは、小児科医、小児外科医、産婦人科外来・入院棟助産師、NICU看護師、小児外来・入院棟看護師10名で構成されています。活動内容は、各部署でスクリーニングシートを用い、育児支援が必要な母子及び家族へスクリーニングを行い、週1回症例検討会を開催し、支援が必要な症例に対しての検討を行っています。必要時には、両親や家族、主治医・看護師、地域保健師と退院時カンファレンスを行い、地域の関連行政に繋いでいます。また、退院時カンファレンスを行わなかった症例でも、育児能力に問題がある場合、地域の保健師へ連絡票を送付し、退院後、保健師より訪問結果を紙面により送付され情報共有を行っています。

今回、出産前から地域と連携を図り、多職種で育児方法を検討できた産科症例と地域の保健師や訪問看護師と情報共有し、支援できた症例について紹介しました。

庄内地域の周産期母子医療センターとして、安心して妊娠・出産・育児が出来るように、妊娠初期から予測される問題を把握し、質の高い小児、周産期医療・看護を提供していかねばならないと感じます。そのために、多職種や地域と連携を図り、個々に合った支援方法を確立していくことが、母子育児支援チームの役割と考えます。



懇親会の一コマ

**関連部署と連携した超緊急帝王切開術受入れ体制の構築**  
**－ 3年間の継続的な訓練で確立したチーム力－**  
 手術センター看護主幹 佐藤 順



当院は平成22年に地域周産期母子医療センターの認定を受け、その後よりハイリスク分娩数が増加傾向となりました。手術室看護師は夜間・休日呼び出し体制となっています。帝王切開術決定から児娩出まで30分以内の超緊急帝王切開術をより安全に提供するため、関連部署との連携強化が必要と考え、体制構築に取り組んでいます。

- 1) 院内看護師による支援体制の構築：夜間管理看護師、集中治療センター看護師、産科入院棟助産師・看護師、救急センター看護師の支援確立
- 2) 支援部署代表者によるプロジェクトチームの結成：婦人科医師を講師とした学習会・年間訓練計画の立案
- 3) 帝王切開術専用の手術室の設置：昼夜問わずの対応が可能
- 4) 定期訓練の実施：合同ミーティング・準備から手術までの流れを習得する合同シミュレーション・手術室業務を業務別にしたブース体験会
- 5) 超緊急帝王切開術に対応できる手術室看護師の実践力の育成：患者受け入れまで司令塔となる手術室看護師の実践教育

上記5項目を段階的に平成22年から今日まで行っています。その結果、関連部署の継続的訓練によりチーム力が向上し、全ての帝王切開術において、出産までの母子の安全が確保されており、しかし、年々合併症を持つ妊婦が多くなり、全身麻酔による帝王切開術の件数も増加しています。今後、全身麻酔対応のシミュレーションも充実させ、地域周産期母子医療センターとしての役割を更に安全な形で果たしていきたいと考えます。

## YBCラジオ「ドクターアドバイスで きょうも元気」ラジオ出演体験記

### ・初心忘るべからず

～YBCラジオ ドクターアドバイスで今日も元気 収録と出演にまつわる思い出

鶴岡市立荘内病院 内科・緩和ケアチーム 和泉 典子

3回目、7年ぶりのYBCラジオ、テーマは同じく「緩和ケア」でした。

今年は、医師20年目、荘内病院に来て緩和ケアをゼロから学んで10年目、という区切りの年で、気づけば医師になり一番長く暮らしたのが鶴岡になりました。収録では7年ぶりに加藤研ディレクターとアナウンサーの佐藤幸子さんに再会でき、お二人の導きでスムーズに収録を終えることができ、プロの仕事に感動しました。



前回と異なるメッセージは、がん患者における早期からの緩和ケア介入の効果が示されており、緩和ケアはがん医療の柱の1つで、病気の治療と並行して行われるものであること、荘内病院でも緩和ケア外来を含め紹介が早くなっていること、厚労省の調査結果（平成25年）では人生の最終段階の医療について家族と話し合ったことがあるのは4割に過ぎず、あらかじめ最期に備えた話し合いを重ねる過程（アドバンス・ケア・プランニング）により、本人の意思が尊重され、代理決定者となる家族の心理的負担が軽減すること、日本は、がんが続く緩和ケアの対象として慢性心不全を挙げており、少数ながら非がんの終末期患者さん（呼吸不全、心不全、神経難病、感染症末期）の紹介を受け関わったこと、などでしょうか。

また、私が鶴岡で緩和ケアを学ぶきっかけとなった、がん緩和ケア普及のための地域プロジェクト（OPTIM）＝庄内プロジェクト介入から10年目であり、病院と地域の多職種が連携して、望んだ場所で過ごせる地域を目指した活動が継続されていること、最期を自宅で迎えた患者さんのエピソード、Note4Uの活用事例とともに、鶴岡・三川地域のがん患者さんの在宅死亡率が、5.7%（2007年）から12.9%（2015年）に上昇したことを地域の成果として紹介しました。今でも退院前カンファレンスには、多くの医師会の先生方が参加くださっていますが、先生方のおかげで患者さんご家族が安心して在宅療養に移行できることを実感しています。この場をお借りして感謝申し上げます。

話題はそれですが、収録前後強く思い出したのは、亡くなられた板垣茂文先生のことです。荘内



病院で働く以前、体調を崩し療養していた自分にとって、不安を抱えての再出発でした。血液内科で抗がん剤治療や造血幹細胞移植を経験してきましたが、固形がんは研修医時代から診療したことがなく戸惑っていました。赴任当初の半年、板垣先生のもとでお世話になり、進行消化器がんの患者さんを先生が選んで担当させていただきました。先生の丁寧な診療姿勢から多くを学びました。消化器がんの化学療法、放射線治

療、種々の内視鏡治療で患者さんのQOLが改善することを学び、また急死した患者さんの病理解剖と一緒に立ち会う、など。中でも、癌性腹膜炎で腹部膨満が高度だった患者さんが亡くなられた後にも腹水を抜いていた姿は、先生の優しさを垣間見たエピソードです。ラジオでは、私の母親が脳梗塞で昏睡状態となった際に、医療の代理決定者として悩んだ経験を話しましたが、私が最期に先生と話したことは、病気を患う互いの親のことでした。私は母親のこと、先生はお父様のことでした。板垣先生は度々進行がんの患者さんを紹介してくださり、一緒に多くの患者さんを診療しましたが、現在も頑張っておられる患者さんがいます。先生の死を伝えた時、「私のいのちと交換してあげたかった」と話され、その存在の大きさを感じながら、ともに悼みました。

私にとっては、地元山形のローカル番組なので、忘れた頃に懐かしい方から反応がありますが、今回は研修医時代を過ごした山形県立中央病院の看護師さんが声をかけてくださいました。多くの命を救っていた内科のベテラン指導医に「先生の原動力は何か」と尋ねたとき、意外にも「治せなくなった患者さんから、先生に最期まで診てもらえて良かったと言われたとき本当に嬉しかった」と話していたことも思い出しました。緩和ケア外来に通院中の患者さんと5日間流した中島みゆきの話で盛り上がったことも嬉しい出来事でした。

最後になりますが、患者さんやご家族のつらさや苦痛に向き合う悩ましい日々ですが、鶴岡で多くの先生方、医療福祉従事者の皆さんに支えていただいたおかげで、何とか続けてきました。「初心、忘るべからず」区切りの年に、自らの言葉で伝える機会をいただき、本当にありがとうございました。

## 平成29年警察検案業務の協力について

福原 晶子

平成29年鶴岡警察署管内の検視状況を報告します。総数180件は、その年によりやや増減はあるもののほぼ一定で推移していますが、一昨年よりは30件増加しました。また、病院搬送例は60件で、こちらも概ね、例年通りの件数となっています。

昨年、大きく変わったのは、一般医師（かかりつけ医＋警察協力医）による検視が7件と、この5年間で最低だったことと、それに引き換え、警察医が113件と例年より30件以上も増加したことです。これは、鶴岡警察署内に、ご遺体を保管する保冷庫が整備されたため、警察からの要請が警察医に集中したものと思われる。

今後、検案業務への協力体制も、さらに検討が必要であると思われる。

### 警察協力医(輪番制度)の運用状況

◎鶴岡署管内の検視状況（平成29年中）

警察医 ※	病院搬送	輪番協力医	かかりつけ医	計
113	60	4	3	180

※警察医は全体の62.8%を担当

	平成25年	平成26年	平成27年	平成28年	平成29年	平均
警察医	82	74	72	84	113	85.0
病院医師	73	86	56	51	60	65.2
一般医師	34	45	34	17	7	27.4
合計	189	205	162	152	180	

## 医師会ニューフェイス ～平成30年2月1日採用～



氏名：寒河江 俊 晴

所属：湯田川温泉リハビリテーション病院 看護部 看護課 第3病棟 介護員

趣味・特技：音楽鑑賞、スポーツ

ひとこと：一生懸命頑張ります。  
よろしくお祈りします。

## 表 紙

## 「 姫路城 」

佐藤 洋司

姫路城は兵庫県姫路市にあり、白漆喰城壁の美しさから白鷺城とも呼ばれています。国宝や重要文化財に指定されており、ユネスコの世界遺産リストにも登録されています。現在の城は池田輝政が関ヶ原の合戦の後8年間かけて築城し、その後大きく破壊されることもなく現在に至っています。また「平成の大修理」が平成21年から始まり平成27年に終了しましたが、修理直後には真っ白だったのですが、私たちが見物した平成29年には白漆喰が少しくずんで一段と立派に見えました。

## 編 集 後 記

暖冬が続いていた近年ですが、今年は、過去最強の寒気、などという予報が聞かれています。1月末には、連日の真冬日で、水道管の凍結や破裂が起こった所も多かったようです。ご多分に漏れず、我が家の給湯器も凍結し、半日お湯が出なくて大変困りました。20年住んでいて、初めての経験で、吃驚してしまいました。

年2回開催される、地域医療連携推進協議会・鶴岡地区医師会・登録医・荘内病院との合同懇談会（この長い名称、どなたか、わかりやすく素敵名称をお考えいただけませんか？）の報告が掲載されています。毎回、荘内病院の取り組みや現状をご講演いただきしており、年々、進化している荘内病院の様子に驚かされます。会員の出席が少ないのが残念ですが、直接、荘内病院の先生方と交流できる、またとない機会です。是非、ご出席いただき、荘内病院との連携を深めていただきたいと思います。

「ドクターアドバイス」にご出演いただいた和泉先生の体験記からも、病院の先生方のお仕事ぶりを垣間見ることができます。和泉先生には、2回目のご出演をご快諾いただきましたが、荘内病院での10年間を振り返っていただき、番組収録の様子だけでなく、板垣先生の思い出もご執筆くださいました。改めて、ご冥福をお祈りしたいと思います。

過去最高の患者数と言われるインフルエンザも、流行真っ只中です。皆様も、体調管理にお気をつけください。

(福原 晶子)

編集委員：三浦道治・小野俊孝・福原晶子・三科 武・佐久間正幸・木根淵智子・渡邊秀平

発行所：一般社団法人鶴岡地区医師会 山形県鶴岡市馬場町1-34

TEL 0235-22-0136 FAX 0235-25-0772 E-mail ishikai@tsuruoka-med.jp

ホームページにも掲載しております  URL <http://www.tsuruoka-med.jp>